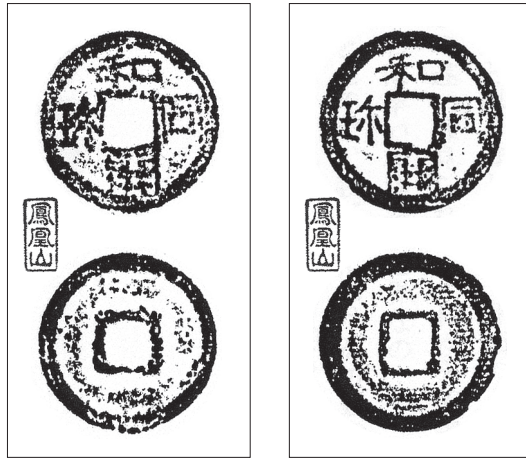


補遺二話

「思いを馳せる」

鳳凰山 神野良英



禾広穿

禾狭穿

います。

ちなみに、この説を「潤字和銅銭を論ず」という形で発表なされたのは春布菴・中川近禮師ですが、これは沖ノ島での発見を四半世紀も遡る、明治三〇年一〇月（『東京古泉会撮摸集』第一号）のことであり、このように昔の大家の眼力の鋭さ、さらには自らの見解を恐れることなく世に問う姿勢にはまったく頭の下がる思いです。

もつとも、その結果、「格」が下がったとしてもいいのか、今なお人気のある「ハネ和同」は別として、この「ノ木和同」のみ比較的入手しやすいものとなっています。

ところで、私はこれらの末期和同銭がどのような経緯で鑄銭されたものなのか、以前より気になっていました。

というのも、『続日本紀』の天平寶字四（七六〇）年の詔によると、当時流通する貨幣（和同開珎）の半数は私鑄銭が占めていたとのことで、今となっては一体どのようなものがそれにあたるのか見当も付きませんが、これらがその私鑄銭で

あった可能性も考えられなくはありません。

また、もう一つの見解としては、沖ノ島でのこれらの大量発見例が示すように、萬年通寶や神功開寶とともに出現していることから、萬年・神功両銭併用期（萬年通寶と神功開寶は等価流通）にあえて前銭、すなわち和同開珎の私鑄をしていた可能性も考えられます。

もちろん、和同開珎と萬年通寶との交換比率は一〇対一であり、偽造者がわざわざ価値の低いものを作るなど、考えにくいことかもしれませんが、寶龜三（七七二）年の詔には、和同開珎をも含めた三銭が等価と定められていることと、さらには私鑄が発覚したときの通貨偽造の罪（極刑）を考えると、新銭の偽造ではないという理由から刑の減免を目論む意図すらあったとは考えられないでしょうか。

以上のことから、私はこれらの末期和同銭を、当時の私鑄銭の可能性が高いと考えているわけですが、このように歴史に思いを馳せることができるのも収集における醍醐味の一つといえるのです。

和同開珎の中に、通称「禾（ノ木）和同」と呼ばれる特異な一群があります。

この「ノ木和同」、古くは「潤字」とも呼ばれ、その存在の少なさや錢体の粗雑さから、「ハネ和同」とともに古和同開珎と見做されて来ましたが、大正一二年の沖ノ島での発見などもあり、現在では新和同開珎の末期のものと考えられて